

助からなかつた長女

「どうして罪ない子が」

服も肌も黒く焦げて血と泥にまみれた人々が、がれきの中をどこへ向かうでもなく行きつ戻りつしていた。焼けてめくれた手の皮を地面まで垂れ下げ、そろそろと引きずっている。1945年8月6日午後、爆心地から1キほどの広島市の中心地。当時24歳だった梶野清子(94)―松山市―は胸に1歳2カ月の長女広子を抱き、身重の体で郊外に避難しようと歩き始めた。

近所の風景は一変し、見渡す限り建物が倒壊していた。まだ所々が炎に包まれており、火の手が及ばない線路上に歩く人波ができていた。清子もそれに加わった。そばを歩く人がばたばたと倒れた。男も女もなく、ごろごろと転がる人々をよけながら進む。自分も連れていってこれと訴えるように手が伸びてくる。清子にそれを気の毒に思う余裕はなかった。ただ恐

ろしかった。少年に足をつかまれそうになった。よく見ると、帽子の下の顔がやけどで水ぶくれし、パンパンに膨れている。清子の中学生の弟に背格好がよく似ていた。歩を緩めた清子に先を急ぐ人々が追い越さずまにぶつかってきて、転びそうになった。崩落した自宅から助けようとして、70年たっても、少年を思うと涙がにじむ。

鉄橋を二つ越えて数歩歩くと、救護所のテントが見えた。けが人の手当てが行われている。広子も診てもらおうと腹掛けを腕がせた時、初めて左脇から腰にかけて、ざっくりと裂けていることを知った。崩落した自宅から助けようとして、70年たっても、少年を思うと涙がにじむ。

ただをして「ここでは施しようがない」とつぶやいた。助けを求めて必死で歩いた。偶然会った知人の助けで、離ればなれになっていた夫の勇(故人)と会い、木炭トラックを借りられた。清子はその日のうちに島根県との県境にある知り合いの商家(現北広島町)に避難できた。

到着後、医師に広子を診てもらったが、「助かりません」と告げられ、家に連れ帰った。朝から何も食べていない広子におかゆを与えようとしたが、のみ込む力もない。周囲に「身重の体に差し障ってはいけない」と言われ、広子と

離れて暮らすことになった。29日、広子が病院で亡くなった。会えたのは亡きがらになってから。顔がきれいで黒髪が、ふさふさとして、まるで人形のようにだと思っただけの間、清子は気を失い、崩れ落ちた。勇らが山へまきを持っていき、火葬した。その時の思いはとも言い表せない。悲しみを通り越して、怒りが湧いた。どうして私の子どもが、罪のない子がこんな目に……。どこへぶつけていいのかわからない。赤い腹掛け、かわいいたく、小さな口。思い出されるのは、幸せな姿ばかりだった。

(中田佐知子)

えひめ
戦後70年



被爆者が描いた被爆直後の広島市市街地の絵。西区上天満町付近で、がれきの中に倒れた大勢の人が描写されている
(西村礼珠作、広島平和記念資料館所蔵)

放射線で深刻な障害

広島平和記念資料館や広島市立大広島平和研究所副所長の水本和実教授によると、広島に投下された原爆の放射線は人体の奥深くまで入り込み、血液を変質させ骨髄などの造血機能を破壊し、内臓を侵すなど深刻な障害を引き起こした。

被ばくの形態は、初期放射線や残留放射線が皮膚を通して入る「外部被ばく」と、死の灰と呼ばれる放射性降下物の微粒子が口や鼻から体内に入る「内部被ばく」がある。水本教授は「近年の研究では、内部被ばくによって低レベルの放射線に長時間さらされる

と、生殖細胞や造血機能、胎児への障害が生じると指摘されている。ごく微量な放射線でもかなりシビアな影響を与えている」とし、原発事故にも共通する危険性が存在すると訴えている。(高田未来)

被害程度は爆心地からの距離や遮蔽(しゃへい)物の有無によって異なる。被爆後約4カ月以内の「急性障害」の症状は、やけどや吐き気、脱毛、白血球の減少など。以後も、被爆者はやけど痕が盛り上がるケロイドなどの「後障害」に苦しみ、1950年ごろからは白血病が増加し、55年ごろになると甲状腺がんや肺がんなどの発生率が高くなり始めたと言われる。胎内被爆者には知的障害や発育不良を伴う小頭症が見受けられた。